



ASUKAモデル

AEDはだいぶ市民権を得てきたと思うが、実際に使ったことがあるという人はわずかだろう。私も講習会の練習で触ったことがあるだけだ。機械の喋る？通りに操作すればイイのだが、果たして救急の現場でうまく対応できるだろうか。

そんなAEDにまつわる話題を。

*

使われなかったAED

少女死亡の教訓、救助モデルに

「ママ、大好き」「何言ってるのー」。2011年9月29日朝、小学6年生だったさいたま市の桐田明日香さん（当時11）は冗談交じりに母親の寿子さん（47）に投げキスをして、自宅を出ていった。

その日の夕方、駅伝のメンバーを選ぶ選考会が校庭であった。明日香さんは全力で1千メートルを走りきった直後に、倒れた。

教師らは呼吸があるなどと判断し、担架で保健室に運んだ。救急車が到着するまでの11分間、心臓マッサージなどの救命措置は行われなかった。学校には、心臓に電気ショックを与える自動体外式除細動器（AED）が置いてあったが、使われなかった。意識が戻らないまま、明日香さんは翌30日の夜、家族が見守るなかで息を引き取った。

呼吸に見えたのは「死戦期呼吸」と呼ばれ、心肺停止後に起こる「あえぎ」だった可能性があるという。救急車を待つ間にAEDなどの救命措置が行われていれば助かったかもしれないと、寿子さんは思っている。

絵が好きだった明日香さん。学校のテストの裏などによくイラストを描いていた。工作や作

文なども得意で、コンクールで賞をもらったことも。将来の夢は母親と同じ看護師。照れくさかったのか家族には話していなかったが、いところには「看護師になりたい」と打ち明けていた。

「大切なものは家族と友だち。幸せなことは私が生まれてきたこと」。明日香さんは自分のプロフィールにこうつぶっていた。好きな男性と幸せになるために、きちんとした女性になろう。そんな目標を「自分への手紙」に書き、宝物入れにしまっていた。

「何があったか知りたいんです」。寿子さんは学校に問うたが、教師たちはうつむいて無言のまま。裁判を起こされることを意識しているようにみえた。葬儀には、遺族が知らないうちに市の幹部の席が設けられていた。

「明日香はどうしたらいいと思う？」。寿子さんは心の中で娘と語り合った。学校の対応に不満は大きかったが、憎んだり闘ったりするという感情は生まれなかった。学校も友だちも大好きだった娘の気持ちに寄り添い、再発防止のために動き出す道を選んだ。

当時の市の教育長で、責任を感じてひとりで桐田さん宅に謝罪に訪れた桐淵博さん（64）が、寿子さんの思いを受け止めた。市教育委員会や医師、有識者らに呼びかけ、事故の教訓を踏まえた救急対応マニュアルづくりに乗り出した。

明日香さんが亡くなって1年後。市教委は、人が倒れたときの対応マニュアルを冊子にまとめた。呼吸や脈拍の有無を判断する方法を説くのではなく、「わからない」場合はAEDを使うとしたことなどが特徴だ。（続く）